

高校二年の作文指導・その実際

吉 田 和 志

はじめに

- 1 週一時間の作文演習
- 2 授業の展開パターン
- 3 授業の実際(一)三学期)
- 4 作家論と五分間スピーチ

はじめに

高校においても以前から作文教育の充実が叫ばれてきたし、57年度から新指導要領の実施に伴い、「国語表現」二単位が新設されようとしている。ところが現状は一体どうであろう。体系的な作文指導法はまだまだ確立しておらず、教育現場の実態に即した、きめの細かい授業も十分に展開されているとは言いがたい。少数の教師が大きな負担をかかえつつも、各自の熱意によっていわば孤軍奮闘しているにすぎないと言えよう。各地の学校・教室でも様々な試みや工夫がなされてきたのであろうが、実践記録として発表されることは少ない。特に私たち経験の浅い教師にとって、すぐれた実践を学ぶ機会の少ないことほど残念なものはないのである。

以下に54年4月～55年2月の作文指導の拙い歩みをあえてご報告したい。様々のご批判をいただくことによって、作文指導の骨格をこれから自分なりに築きたいと考えている。

1 週一時間の作文演習

本校は各学年普通科10学級。二年から文理別のカリキュラムに分けられる(学級は文理混合で編成)。24単位は学級毎に授業を受けるが、次の8単位は文理別となる。

。文系六クラス(地学Ⅰ3、日本史2、世界史2、現国演習1単位)
。理系四クラス(物理Ⅰ3、化学Ⅱ2、日本史か世界史3単位)

文系六クラスが学習する現国演習1単位は二年担当教師の裁量に任されていて、問題集をする学年やら作文にかかりきりとなる学年やら自由である。二年担当となった私たち三名は作文演習に取り組むことにし、次の方針を立てた。

(1) 三人で相談・協力してすすめていく。

(2) できるだけ生徒に文章を書かせるが、生徒間の相互批評を時間の中に組み入れ、読み手を意識して書くようにさせる。

(3) 一学期は身近なテーマで、二学期は抽象的なテーマで書かせる。夏休みをはさんで作家論(15～20枚)を仕上げる。三学期は五分

間スピーチをさせる。

2 授業の展開——一テーマで四時間——

前年度（一年担当）に私は何回かの作文指導を通じて次のような展開パターンを固めていた。

第一時——テーマの指示、説明。必要ならば資料を配布する。

（テーマによって、各自で考えさせる時と学級で討論させた上で考えをまとめさせる時とがある）

家庭での下書きを指示する。

第二時——八百字詰原稿用紙を配布。推敲して消書・提出。

（あえてこの時間を設けたのは生徒に推敲・消書を意識させようとしたため。配布する原稿用紙は八百のマス目と批評欄とを一枚にまとめた手製のもの。八百字程度が、文章の展開を意識しつつ書きかつ読むのによいようだ）

第三時——相互批評。

（前時に提出させた作品を無作為に配布して読ませ、五段階評価と総評を書かせる。評価は主題の明確さ・構成展開のよさ・表現描写のうまさ・読みやすさの四項目について5～1の評価をし、総評では具体的に文章化して指摘する。一枚を15分程度で処理するので、結局自分の作品は三人の生徒に批評されることになる）
この後回収した生徒作品には必ず目を通し、訂正を朱で入れる。
次時で取り上げる作品を探す。

第四時——まとめ。生徒作品のうち、(1)すぐれた作品をプリントして学習のまとめとする。(2)訂正すべき箇所を多く含んだ作品をプ

リントして、一緒に考えていく（例えば長すぎる一文、主述の不一致、接続詞、指示語、読点等を特に取り上げる）。

以上、この四時間で一つの展開が終了する。こうした展開は週一時間の作文演習を考えれば問題もあるが、教師や生徒の負担軽減も考慮して当面これでスタートすることにした。

3 授業の実際——二年五・六組の場合

私の担当する二クラスのうち、二年五・六組（男20女26計46）の授業の実際をレポートする。

一学期

△第一時（4/10）

アンケート調査。まず生徒に次の七項目について調査した。

1. 文章を書くことが好きか嫌いか
2. その理由は
3. 書くことに関して工夫努力しているか
4. 具体的に書きなさい
5. 一年間にこの授業で扱ってほしいことは
6. 書きたいテーマ・書きやすいテーマは

△第二時（4/17）

アンケートの結果報告（プリントNo.1……以下、配布したプリントをNo.と略称する）

予想以上に書くことに強い関心を持っていた。また各自で結構工夫しており、ユニークなものもあった（好きな作家の表現をそっくりまねる、国語辞典を読む、比喩を考える、他人をいかに笑わせ

るかをいつも考える等)。

書くことの意味は何か(プリントNo.2・No.3)を考えた。

△第三時V(4/24)

第一回作文「私の父」——話題の探し方とその練習(プリントNo.4)

話題の探し方として、四方向から観察する方法(「作文教育の方法」71「明治書院」)を紹介。「水」について練習し、次いで「私の父」について考えさせた。課題として、構想をしっかりと立てて下書きをしてくるよう指示。

△第四時V(5/8)

原稿用紙の書き方の説明(プリントNo.5)。清書して提出(八百字詰原稿用紙と読者へのメッセージ用紙を配布)。

このメッセージ用紙とは書き手から読み手への伝言板みたいなものでB6の大きさ。右半分には主題と話題の柱、左半分には各自の工夫したところ、ここをこう読んでほしい旨の内容を書かせた。書き手のねらいを記すことよって読み手(批評者)との交流をさせたいと思い、作品に添付して提出させた。以下に「工夫したところ」の一例をあげる。

「自分の病気の様子をだらだらと書き過ぎて肝腎なところで字数が足らなくなった。過去の文だが途中で現在形にしてみた。その方が良いと思ったんだがどうだろう?おかゆの味がどんなに自分を落ち着いた気分させたかが分るように表現したつもり(後略)」

△第五時V(5/15)

相互批評。五段階評価の項目を説明し、どんなポイントに着目し

て文章を読んでいけばよいかを話した後、相互批評に入る。

△第六時V(5/29)

生徒作品「母の手」「頭痛」の検討(プリントNo.6・No.7)まず「母の手」を読み、よい表現・改めるべき表現を指摘させ、実際に改めさせた。この作品でねらったのは、

1.りきみすぎ、ムダの多い表現を平明にする。

2.長すぎて分りにくく、主述の照応も定かでない文を短く切っすっきりさせる。

△第七時V(6/5)

第二回作文「私の父」のまとめ(プリントNo.8)と作家論についての説明(プリントNo.9)——これについては4で述べる。まとめとしては、何といっても個性的・具体的な話題を見つること、しっかりした観察眼を持つことが魅力的な文章につながる指摘した。

第二回作文「忘れぬこと」の指示(プリントNo.10)。じっくり考えてみて、自分の心の中に沈潜する出来事を探し出すよう話し、家庭での下書きを指示。

△第八時V(6/12)

清書して提出(原稿用紙とメッセージ用紙の配布)。

△第九時V(6/19)

相互批評。次に生徒作品と批評をあげてみる。

忘れぬこと

「おい、印鑑もってきたか。持ってきたらすぐ職員室こい」

冷たい先生の声が、私にそう命令する時、私の心は何かでもぎとられるかの様に、痛くそしてみじめな気もちで、いっぱいだった。小学校四年生の時、私の父は、突然の病気で長期入院した。そして三年後、小学校六年の時に、家計の状態がきびしくなつて、生活保護を受けなければならなくなつた。父の病氣はまだまだ休養が必要だったのである。

その後、私は、生活保護の手続きやらで、何回も職員室へ呼ばれたり、授業の途中で、家へ印鑑を取りに帰されたりした。そのたびに、クラスの子の私を見る目が、かわつてきたのである。ある日私は、先生に呼ばれて、職員室へ行った。五、六分話をして教室に帰つてきた時、クラスのある男子が、

「鉛筆も買われへんぐらいお金ないのん」と半分鼻で笑いながら私に言った。その時ほど、自分がなさげなく感じたことはない。また同時に、父の長い入院をうらんだ。それ以来、給食の集金があるたびに、私はその場から逃げる様になつた。生活保護を受けている子どもは、給食費を払う必要は、なかつたのである。

先生も容赦なく私に対して「家へ印鑑取りに帰れ」とか「職員室まで来い」とみんなの前で言った。私はだんだんと先生をきらい、学校さえも行く気がわかなかつた。そんなことの繰り返しに耐えられず、私は母になんとか生活保護をうち切つてほしいと頼んだ。

教師というものは、生徒の陰になり日なたになりして、見守つてやるのが本當の姿だ。私は、このようなつらい経験を通じて、万一私が教師になるようなことがあつたら決して私のような思いは生徒にさせないということをや、かたく心に刻んだのを覚えている。

C君評「ひどい先生ですね。その先生の態度と、傷ついていくあなたの様子が十分に読みとれます。段落も適切にとれている。八百字の制限があるので残念だが、最後の段落を充実させてほしいところ。29行目の「容赦なく」はもっと述語の近くにおくべきです。」

△第十時V(7/2)

第二回作文「忘れぬこと」のまとめ(プリントNo.11)と他クラスの問題を紹介(プリントNo.12・No.13)。

今回も話題の良し悪しが文章の出来をも決めた。ある出来事を漫然とやりすごすのではなく、鋭い感覚で受けとめることが大切と話した。

「わかりやすい文章を書くためのテクニク(1)」(プリントNo.14)を配布して練習これは「高校生のための文章読本」(本間徹夫著)、『日本語の作文技術』(本多勝一著)からまとめ直したもの。今回は、(1)文末決定性という日本語の特色、(2)誤解の少ない語順とで、この二項目についての説明と練習問題である。

以上が一学期の授業であるが、5/1、5/22、6/26、7/10、7/17は学校行事や考查等のため授業はなかった。

二期

△第一時V(9/11)

第三回作文「元号法案をどう考えるか」(プリントNo.15……法案の参院可決を報じる新聞記事(六月六日付)と五名の参考人意見をのせた記事(四月十四日付)とを転載したプリント)を配布して説明。

意見作文の初回として、論議を呼んだ元号法案をとり上げたのだが、教室でだずねてみると大半は何の関心も持っていなかった。しかしじっくりと考えさせる機会だと思い、このまま行なうことにした。書くときには、(1)元号に対してどう考えるか、(2)その考えの上で立って法制化をどう考えるか、こうした論点をもつようにと話し

た。

私たちが元号法案をテーマに選んだのは次の理由による。

1. 賛否両論がはっきりした形で出やすい。
2. 自分の考えを読み手にわかりやすく伝える格好の練習となる。
3. この問題について高校生の意見を知りたい。

△第二時▽(9/18)

清書して提出(原稿用紙を配布)。以下に生徒作品を引いてみる。

・法制化よりも常識に訴えて

私も日本人、多少の愛国心は持ち合わせているつもりである。だから、文化的遺産、元号にも愛着を感じると共に、日本人としての誇りすら感じずにはいられない。しかし、元号の強制使用というものには賛成できない。私には、この元号が法律で定めなければすたれてしまうようなモノとは思われない。

昭和のこの二つの文字には、過去五十余年間の、一言では言い尽くせない様々な歴史を含んでいる。無論、昭和に限らず、大正・明治においても、その歴史の深さは変わらないであろう。日本人は、元号と共に生活してきたのだ。つまり、日本の歴史は、元号によって区切られている、といっても決して過言ではないと思う。それほ

ど、元号は、日本人に密着しているのだ。もう慣習化されているはずである。ある人は、天皇象徴制に最もふさわしい、とおっしゃる。なるほど、一世一元の元号ほど、それにふさわしいモノはない。しかし、それは、民主主義にのっとり、我々国民が、元号を自主的に認めた時に初めて言えることではないか。

聞くところによると、まず公式文書から、義務づけるという。だが、能率的な面で考えてみると、西暦の方が明らかに合理的である。元号だと、大正から昭和などの様に二元号に渡っている場合の計算の不便さは言うまでもないし、ただでさえ、日本のお役所は、待たされることで有名なのに、この様な無配慮な措置は遺憾きわまりない。

イギリスには成文憲法がない。したがって彼らは、自分たちの常識に基づいて、行動しているのだ。日本政府は、元号を、法案として、強制を呼びかける前に、国民一人一人の常識に訴えるべきである。

△第三時▽(10/2)

相互批評を行なう。

△第四時▽(10/23)

第三回作文「元号法案」のまとめ(プリントNo.16)の材料としてはやはり無理だったようだ。とらえ方が浅く、皮相的ではない。高校二年生の多くは「便利」「不便」というレベルでしか元号問題をとらえられないのだろうか。ふだん社会政治面に目を向けていないので、消化不良に陥ったようだ。ちなみに法制化賛成30、反対50、賛否にふれず9である(二クラス合計で89)。

第四回作文「楽しい我が毎日」の指示(プリントNo.17)。予定にはなかったが、九月末日締切りの作家論とこの元号法案とで苦しんだ様子なので、軽い書きものをに入れることにした。朝日新聞家庭欄に掲載(火曜日)される「ひろば」をヒントにしたものである。

△第五時V(11/6)

第四回作文の読み合わせ。今回は相互批評を行わず、傑作を選んだ。

△第六時V(11/13)

傑作集のプリント(No.18・No.19)を配布。これを朝日新聞に投稿したところ、十一月十九日付の同欄に次の二篇が掲載された。

亡き祖母の思い出(岡見泰夫)

ある日、学校から帰った僕は戸を開けてもらうためにノックしました。数分後にやっと気付いた祖母は「どなた?」。「僕だよ」と答え、開けてくれるのをじっと待ちました。ところが、老衰で頭のボケていた祖母は、ノックの主を確かめたことで満足し、自室へ戻ってしまつたのでした。

修学旅行にて(政井貫子)

上高地でのこと。私たちは明神池の入口近くの水たまりで二羽の鴨が別々に遊んでいるのを見ていました。私が一羽の方にカメラを向けると、もう一羽がさりげなく寄って来て二羽そろってポーズをとってくれます。そこでみんなが言いました。「観光地やなあ!」

「わかりやすい文章を書くためのテクニク(2)」(プリントNo.20)を配布して練習。今回は読点の打ち方を中心に説明と練習問題。

△第七時V(11/27)

第五回作文「ハイジャックと人道問題」の指示(プリントNo.21)。50年〜53年の主なハイジャック事件の概要を説明し、乗っ取り犯の要求に厳しく対処する西欧諸国と、人命第一の立場から要求を受け入れる日本と、どちらを是とするかを問うたもの。これも意見作文である。次回より行なう五分間スピーチの要領を説明(プリントNo.22)——これについては4で述べる。

△第八時V(12/4)

五分間スピーチ第一回。

- 1 池田滋郎 「ある修学旅行から」
- 2 松本みどり 「逃げ出したいけど——」
- 3 市村尚三 「銭と情と男と女」
- 4 山崎和代 「先輩の手紙」
- 5 伊藤淳夫 「鈍行列車」
- 6 吉田朗子 「電車の中で」

△第九時V(12/18)

五分間スピーチ第二回。

- 1 川端逸生 「ヤセることは肥ることより簡単?」
- 2 政井貫子 「独断と偏見に満ちた男性論」
- 3 神吉一範 「知らぬが仏」
- 4 堀江森花 「関西弁万歳」
- 5 河野喜之 「まわりを見わたして」
- 6 橋本教子 「ある人からの言葉」

二学期はこうして九回で終了した。体育祭や修学旅行、考査や私
の主張等で十分な授業時間が確保できなかった。なお第五回作文の
提出は、期末考査とぶつかつたため任意としたので20名弱が提出し
たきりとなつた。私が添削して返却した。

三学期

△第二時V(1/22)

五分間スピーチ第三回。

- 1 小林直樹 「思い出の一ページ」
- 2 中井章代 「なぜの時代」
- 3 畑 俊一 「一つの経験から」
- 4 露口茂美 「人も歩けば人にあたる」
- 5 伊藤美樹 「悪夢のような二時間」
- 6 田端由美子 「カメの甲より年の功」

△第二時V(1/29)

五分間スピーチ第四回。

- 1 井上ゆみ 「汝の隣人を愛せよ!」
- 2 新谷美和 「一月十五日晴れ 日記から」
- 3 岩崎久美子 「ああ花の十七才」
- 4 庄ゆかり 「風と共に……私も去りたい」
- 5 大西洋子 「となりの芝草」
- 6 塩田真美 「東京弁VS関西弁」

△第三時V(2/5)

五分間スピーチ第五回。

- 1 大原ゆかり 「私のちびころ物語」

- 2 桜井美枝 「レディ'80」

- 3 大森いづみ 「心の支えとなるもの」

- 4 岸本尚子 「女はなぜ泣く?」

- 5 柏木理恵子 「生徒会——打ち込んで・充実感」

- 6 釜江絢子 「カピの生えた話」

第六回作文「オリンピック参加不参加をどう考えるか」の指示(プリント№23)。日本政府が不参加の意向を表明したときであったので、タイムリーな問題であり、生徒の関心も高いと思われたので、意見作文の最終回として出した。生徒に配布したプリントには、日本政府不参加の意向を大きく報道する一月三十日付朝日新聞を転載した。次時に提出できるよう原稿用紙も配布した。

あと三回の授業で五分間スピーチを終え、最後の授業では一年間の歩みを振り返って生徒の感想・意見を聞く予定でいる。

4 作家論と五分間スピーチ

(1) 作家論について。

三年前に高二を担当したとき、六月末締切りで書かせたことがある。文庫本巻末の解説を参考にしたり、本文からの引用、年譜などで、要求した15〜20枚を埋める者も多いが、中にはすぐれた論を展開する者もいた。それが頭にあったので今回も書かせる予定ではない。そのわらいは、

1. 一人の作家を集中的に読み、かつ調べる機会をつくる。

2. 高校二年にとってかなりの負担と思われる15枚をとにかく書いてみる。

この二点であった。途中、細かい指示はあまりしなかった。六月五日に「作家論について」のプリントを配布して説明した。その後、毎時間五分ほどとって五、六名の者に、どの作家を選んだか、どの作品を読んだかなどの報告をさせた。六月五日配布のプリントの要点を次に掲げる。

△目的▽一人の作家を集中的に読んでいくことと長文のレポートを書くこと。つまり読書と作文の二つを経験してみる。

△概容▽

1 一人の作家を選び、その作家のいくつかの作品を通じて、作家の一生と彼が追い求めたテーマとを考えていく。

2 締切りは九月末日。

3 枚数は原稿用紙15〜20枚。表紙と目次を各自でつける。

△手順▽

1 どの作家にするか決定。

2 その作家の年譜を作り、重要作品をリストアップする。

3 作品を読んでいく。作品解説の重要点もメモしていく。

4 作家の全貌はとらえきれないであろうから、読んでいくうちに関心のある項目・問題点にマトをしぼる。

例・北杜夫のユーモアについて——どくどくするマンボウシリーズから——

5 メモして集めた資料を並べてまず目次を作り、アウトラインを設定する。

6 アウトラインに沿って文章化する。辞書を引きながら正確に記述する。

7 清書する。

二学期に入り、9/10ごろに「作家論の作製状況」を書かせたりしたのでそろそろあわて出した。ほとんどの者が文章を書き始めたのは中旬ごろで、九月末まで必死に書いたようである。

提出された作品のテーマを五組から拾ってみる。

・筒井康隆とその宇宙

・作品に現われた漱石の生涯と思想

・意味えは「壁」を越えて「故郷」へ——安部公房の世界

・五木寛之論——デラシネの魂

・太宰と私——その生涯と作品を通じて

・めるへんの世界——松谷みよ子の作品より

・失格品からのメッセージ——太宰治の生涯と作品より

・井上ひさしの作品——ユーモアの原点

・問題点が三つ考えられる。

1 様々な作家を取り上げる生徒に対して、細かい指導が行なえず

ほとんど任せきりであったこと。

2 内容をどう評価するか。生徒作品を授業で活用できぬものか。

3 未提出者に対してどう指導していくか。

これらの問題点のうち、2については指導者（吉田）が読み、五〇六行の講評を記すことしかできていない。授業で使うことは生徒がいやがあったので実施しなかった。3は度々の催促と面接（どこで行き詰っているかを聞き、具体的な資料を与えたりした）とで解決できた。未提出者は二クラスで二名である。

② 五分間スピーチについて。

作文演習の発展段階としてこのスピーチを考えたので、必ず原稿を書かせ、それをもとにしてスピーチすることにした。そして皆の批評を受けることにした。ここでも話しっぱなしではなく、相互批評を取り入れたのである。

授業内容の概略を次に述べる。

(二日前の朝)

① 原稿提出……書き言葉でよい。五分以内におさまるよう原稿用紙四枚前後。

(その日の放課後)

② アドバイス……原稿を返却しながら一人ずつに注意を与える。

(当日)

③ 五分間スピーチ……予め、題と氏名とをスピーチ順に板書。

・ 毎時六人。

・ スピーチはテープに録音する。これは反省の材料として希望者に貸し出すのと緊張感をもし出すため。

④ 批評……メモ用紙と批評カードとを配布しておく。

・ 聞き手はメモを取りつつ聞くように指導する。六名のうち二名を選んでカードに記入する(特定の者に批評が集中するのを避けるため、一名は指定、一名は自由に選ぶ)。

・ 時間後、批評カードを集め、スピーチ者に渡す。

(翌日)

⑤ 反省の提出……原稿・批評カードも共に提出する。

以上のような進行でスピーチを行なったのだが、各段階をもう少し補足してみる。

① 原稿提出を前日でなく二日前に義務づけたのは、指導者のアドバイスを受けて必要なら書き直す、また練習をするための余裕をとったため。実際、数人の生徒は話し合いの上で全面的な書き直しをした。前日の提出なら、書き直しはまず出来ないだろう。

② アドバイスの主なものは、

(1) 皆に聞いてほしいことが話題の核となっているか(主張が明確か)。

(2) 話題が具体的か、分散していないか。

(3) ムダな表現はないか。漢語の使い方に配慮はあるか。

(4) 題・書き出し・結びは効果的か。

(5) 内容・話し方で何か工夫をしているか。

③ 丁寧な批評をさせようと思えば毎時六人がギリギリのところだろう。一クラスで八時間も費やすことになるから、どこかで工夫すべきかもしれない。

④ 批評カードの形式・項目についてはあれこれ考えた。五段階評価の各項目は改める余地もあるだろう。主題を一文でまとめさせるのは、自分の主張が皆に伝わったかをスピーチ者に確認させるためと、聞く者に要旨を一文でまとめめる練習をさせるためである。

⑤ 提出された反省の一部を紹介しておく。

「話題は、自分としては分りやすかったのではないかと思えます。批評カードにも、話の内容がよく分ったと書いてくれたのがあって、うれしい。会話文の場面では、賛否両論ありました。

批評カード

No. 6	主 友情とは 待っていても得られるものではなく 題 自分から つかみとる努力をして、はじめて得られるものである。 (一文で)	
話し方	明瞭だったか (発音・速さ・大きさ) 3	概 評 間があきすぎている部分と口調がさめた感じだということが少し退屈な印象を与えた。 内容について——私自身すごく今の友達関係（特にクラスの）に不満をもっているのですごく同感！
	練習できていたか (読むのではなく話す) 4	
内容	適切な話題であったか (具体的・理解しやすい) 5	
	訴えるものがあったか (自分の主張・アピール) 4	
工夫されていたか (話し方内容とも) 3		

「感情がこもっててよかった」「もうちょっと感情こめて」と人によって感じ方が違ったようです。「おぼあちゃんありがとう」という所でどっと笑いが起ったのは意外でした。前半の笑いを求める部分では全く反応がなかったのですが……。(以下略)

まとめ

作家論
↓
五分間スピーチ
↑

こうして一年間の作文指導をほぼ終えようとしているのだが、内容については私たちの当初の計画に近い形で進んだ。すなわち一学期は身近なテーマ(第一回は人物、第二回は出来事)で、二〜三学期は意見作文(できるだけ新鮮な話題を選んだ)を書く。それらと並行して作家論・五分間

- 4月 1. 私の父
- 5月 2. 忘れえぬこと
- 6月
- 7月
- 8月 3. 元号法案
- 9月 4. 楽しき毎日
- 10月 5. ハイジャック
- 11月
- 12月
- 1月 6. 五輪不参加
- 2月
- 3月

スピーチを展開してきた。

これまで書かせた回数は八百字の文章を六回といかにも少ない。

週一時間の授業では学校行事で抜けることも多く、やむを得ないのかもしれないが、それでも何らかの工夫(四時間での展開を改める、あるテーマについては授業外で希望者だけに書かせる等)によって改めることはできよう。もう少し短い文章を数多く書かせても良かったかも知れない。やや大上段に構えすぎたきらいはあるよう

だ。

授業の内容そのものについての反省は、最後に生徒に対して行なうアンケートによって明らかにするであろうが、今は作文演習に付随する二、三の点について述べておきたい。

(1) 一学年10学級の大規模校ともなれば、一人ではなかなか実践しにくい。個々の授業での散発的な試みはありえても、一年間を通じての継続や三ヶ年を見通しての実践は難しいものである。しかも適当なテキストのない現状では、担当者の創意と工夫によって一つの授業を創造していかねばならない。その意味からも同僚教師とのチームワークと共同学習とが大切である。

(2) 私たち三名は文系六クラスを二クラスずつ受け持った。二クラス90名程度が良心的に指導できる限度ではあるまいか。兵庫県下のある高校では、一年生の現代国語の授業だけは国語科全員が一学級ずつ分担し、この一年間で徹底的に作文指導を行なうと聞く。それとすぐれた取り組みであろう。

(3) 各現場での地道な積み重ねを知りたいと切に願う。様々な実践を知り、時にはそのまま受け入れ、時には工夫を加えながら試み、消化していく中で自分なりの体系・理論を確立したいと願っている。最後に三年生での構想を述べたい。二年での作文演習を受け、どう発展させるかがこれからの課題である。日常の授業で生かすことはもちろんのだが、何か特別の時間が設定できないかと考えていた時に気付いたのが必修クラブである。

本校では月曜日第四限に一・二年対象に必修クラブ(例えばソフト、テニス、囲碁等)が実施される。三年生はこのとき「ゼミ」と

称するものに参加する。大学のゼミとは比較にならないが、各先生の専門分野を30名程度の生徒と共に演習する形式をとっている。本年度開講されている国語科関係をあげれば、

・(原) 謡曲を読む

・(田中) 御物本「更級日記」輪読

・(大森) 「和泉式部日記」演習

等である(他に二ゼミある)。

このゼミに「文章教室」を開講し、内容は次のように考えている。文章を書く基本から始めて様々な文章を書いていく。懸賞作文に応募してもよいだろう。そして最終的には卒業研究論文を書くのが目標。そのテーマは国語や文学に限定せず自由に選ぶ。

思いつくままにあげてみれば、

・恋愛論——様々の恋愛論を読み比べて——

・加古川市の都市開発について

・名刹鶴林寺の歴史とその存在

・ロック音楽の現状と未来

・播州地方の方言研究

これもまた一つの試行錯誤。失敗を恐れず取り組んでいきたい。

(昭和55年2月8日稿)

(兵庫県立加古川東高等学校教諭)